
竹林奇譚 第二話 癒せぬ傷

すばる & ぴの子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竹林奇譚 第一話 癒せぬ傷

【Zマーク】

Z45550

【作者名】

すばる&ぴの子

【あらすじ】

「私が最も忌むべき者をこの世から消してほしい」

ある日、雲隠たちのもとにやってきた青年克安はそんな願いを口にする。

だが、彼の願いの裏にある、真の願いに気付いた雲隠は……。

ある秋の日のこと。

都は、その年の豊作を祝つて盛大な祭りの真つ最中だった。

「おい！」

背後からの聞きなれた声に、男は振り返る。

見れば、そこには同僚たちの姿があった。

みな、いつも城で見かける兵士姿とは異なり、ずいぶんと身軽な格好をしていた。今日は思い思に飲んだり食べたりと、楽しいひとときをすごしているようだ。

男のもとに近づいてきた彼らは、男が持つ荷物に気づいた。

「旅に出るっていう噂は本当なのか？」

「ああ」

男は笑つて荷物を顔の高さまで持ち上げてみせる。

「これからちょいと都を出ようと思つていたところだ」

仲間たちは口々に、何も祭りの最中に出ることはないかうと言つた。

「祭りの最中だからこそ出るんだ。周りに気にされずにすむ」

「お前な……」

仲間の中でも、彼が幼い頃から知る一人が前へと進み出て男の肩を叩いた。

「ずいぶん長い休暇をもらつたと聞いたが 戻つてくるよな？」

男は笑みを崩さぬまま、その問には答えなかつた。

荷物を肩に背負いなおすと、仲間たちに手を振り歩き出す。

「克安！ 絶対に戻つてこいよ！」

だが、男は仲間を振り返りもせず、雑踏の中へと姿を消していく

た……。

前日まで降り続いた雨がやんだのを幸いに、学然は家中の窓や戸を盛大に片つ端から開け放った。

部屋の中の湿つた空気を外に追い出さんとするかのように、ものすごい勢いで掃除コントインを開始する。

邪魔だ、と雲隱は追い出してしまったため、家にいるのは学然だけだった。

日が中天に差し掛かったころ、ようやく一通り掃除が終わり、今度は昼食をどうするかと考え出したときだった。

「すまない」

外から声がした。

雲隱に出てもらおうと口を開きかけたところで、そういえば自分が追い出しちゃったことを思い出す。

「つたく、めんどーな」

実際に勝手なことを思いながら、学然は表へと出た。

「突然、すまない。道に迷つてしまつて。主はいらっしゃるか?」

戸の外には、一人の男が立つていた。

年の頃は学然より若干上だろうか。二十五、六に見える。無造作に後ろに束ねた銀の髪、左の眉から頬にかけての傷。隻眼の男は、そんな外見には似つかわしくないほどの、穏やかな瞳で学然に問うた。

「主……ねえ……」

やはりこういうときは、雲隱が主なんだろうか、と学然は考えた。自分と学然の関係は、主従ではない。だが、この庵の主は紛れもなく雲隱で、自分はただの

(居候?)

なんだか悔しい気がしないでもないが、それが事実なのだから、学然には文句をいう資格はない。

それにしたつて自分が居なければ、雲隠はまともに「」飯を作るこ
とも、部屋の掃除をすることもできないのだ。なのに

「どうか…したのか？」

「ん、ああ」

眉間に寄つたしわを右手でぐりぐりとほぐしながら、学然は答える。

「今は外に追つ払つてゐる。まあ、もつ少しだつたら雇だし、戻つ
てくると思うけど？」

「そうか……」

男はふむ、と考え込んでいたが、直に顔を上げると学然に問うた。
「では、あなたに聞きたい。ここはどこだ？」
するつと学然はざつこける。

「あんたね……。迷子か？」

「最初に言つたと思うが。道に迷つたと」

（またずいぶんとでかい迷子です）

学然は肩で息をつくと、手招きをし、この不思議な客人を居間へ
と導いた。

彼は克安と名乗つた。なんでも、都からわざわざやつてきたのだ
そうだ。

ここいらをふらふら歩いていた理由は、主が戻つてくてから告げる
と言つたきり、彼は学然には何も話してはくれなかつた。

しかし、彼が語らずとも、この庵に人がたどり着く理由といつた
らひとつしかない。

（雲隠を訊ねてきたつてことだよな）

そして、その背後には、彼が雲隠に叶えてもらいたい強い願いを
持つてゐる、という事実がきつとあるに違いない。

人間たちの間で広まつてゐる噂 どんな願いでも叶えてくれる
仙人が、日が昇る方向に行つたところに住んでいるという。ただし、
そこには誰でも行き着けるわけではない。強い強い願いを持つてい
る者。それを、仙人に認められた者だけが彼に会うことができるの

だと、そう人々は信じていると聞いたことがある。

その噂を信じた人々が今までに何人もここを訪れた。そのたびに雲隠は人々の言葉に耳を傾けた。

台所で予定より一人分多い昼食の用意をしながら、学然はつぶやく。

「また泣くことになんかきやいいんだけどな

「誰が泣くんですか？」

「おわつ！」

思わず大声を上げる。

「何ですか……」

振り返ると、ものすゞく不審そうな顔で雲隠が立っていた。

「帰ってきてたのか……」

「そろそろ昼食の時間かと思いまして」

につこりと笑顔で返す。

雲隠には食事の準備を手伝おうといつ氣など、さうせらしないらしい。もちろん手伝おうと言われても、逆に妙なことになりそうな気がするので、丁重に断ることになるのだろうけれど。

ここではたと学然は克安のことを思い出す。

「そういう、居間に客がいたはずなんだけど？」

「居間？ どなたもいらつしゃいませんでしたが？」

「んー？」

学然はおかしいな、と居間を覗く。が、雲隠が言つたとおり、そこには誰もいなかつた。

「庭か？」

扉を開けると、果たしてそのとおり、克安は庭にある石の腰掛に座っていた。そこから、庭に植えてある楓の木をじっと眺めていた。季節は秋。真っ赤に染まつた楓はまるで燃え盛る炎のようだ。庭には楓以外にも竹がここかしこに植えてあり、竹の鮮やかな緑との対比がますます楓を美しく見せていた。

「克安」

「己の名を呼ばれ、すうと顔を上げると雲隠の姿を確認し、立ち上がり

がつた。

「お待たせしてしまったようですね」

雲隠のほうから彼に歩み寄る。

「失礼いたしました。わたくしは雲隠と申します」

「こちらこそ突然すまない。私は克安という」

頭を下げて詫びた雲隠に、克安も同様に頭を下げた。

「とりあえず、食わない？ 冷めるとまずくなる」

学然の提案に、まずは昼食をとるために、居間に戻る。

この日の昼食は湯麺タンミンだった。さっぱり味の汁にねぎと麺だけというとても質素なものだ。だが、学然の自信作でもあつたその麺を、都でもそうめぐり会えるものではない、と克安もほめてくれた。

「最近の都はどうですか？」

克安は学然や雲隠の求めに応じて、克安は彼が知っている限りのことを見つけてくれた。

「あなたたちはいつからここに？」

都では当たり前のことも、驚いたり感心したりしている二人を不思議に思つたのだろう。克安の問いに、二人は顔を見合わせてふつと笑つた。

「どれくらいここにいるのかは、もうわからなくなつてしまつた。それくらい昔からですね」

「ほう……」

克安はそんな雲隠の言葉にかたんと箸を置くと、居すまいを正し訊ねた。

「確認をしたい。私は願いを叶えてくれるという仙人を探している。それはあなたか？」

突然の克安の問いにも、雲隠は動じなかつた。それは、やはり彼がここにたどり着いたときからこうなることが予測できていたからだろう。

「そうです。あなたが探しているという者はわたくしです」

雲隠ははつきりとした口調で答える。

「では……私の願いを叶えてほしい」

「あなたの願いは？」

克安は少しだけ間をおいた後、口を開いた。

「私が最も忌むべき者をこの世から消してほしい」

げつと学然は克安を見た。

彼が願いを持つてきているのだらうとこいつとまでは想像できた。だが、まさかこんな願いを持つてくれるとは……。

なんという男だ。他人の命を奪つてほしいなんてことを言つとは。そのような男には見えなかつたのに……。

（人間つてのは恐ろしいもんだな）

雲隠をちらりと見やる。

人の命を奪う願いなど、雲隠が聞くわけなどない。事実、今まで雲隠はそういうた類の願いは聞いたことが……。

（なかつたつかけか……？）

思い返してみたが、「聞き届けたことがない」とこいつより、「そういう願いを持つた者が来たことがない」とこいつとに学然は気づいた。

（これも仙の力つてやつか？ それとも偶然か？）

どちらにしろ、この願いは無効に違いない。

雲隠がこのような願いを叶えることは絶対にないはずだ。

今まで長い年月、彼のそばにいたのだ。もう雲隠の性格は十分にわかつている。だからこそのいえる。彼がこの願いを叶えることはありえない。

「では、あなたの願いと引き換えに、あなたの最も大切なものをいだきます」

だが、学然の予想に反して、雲隠は、いつも庵にやつてきた者たちにかける言葉を今回も口にした。

学然は大きく瞳を見開き、言葉を失つた。そして雲隠のこの言葉に驚いたのは、克安も同じようだつた。

田をぱちくりさせて、雲隠と学然を交互に見た。

「金、ではないのか？」

『もつともな反応だ。

ここにくる者の八割はそのように反応する。

法外な金を請求されるのではないかと、予め「私はそれほど裕福ではない」と申告する者さえいる。

だが、これまで雲隠が、訊ねてきた者に金を要求したことは一度だつてなかつた。結果的にその者の「大切なもの」が金だつたことはあつたかも知れないが、願いを叶える代償として、初めから金を請求したことはない。

「お金はいりません。あなたの最も大切なものを、わたくしはいただきたいのですから」

「だが……」

克安は眉間にしわを寄せた。

「あいにく私には、大切なものがない。だから、大切なものを、といわれても差しあげることができないのだが」

どうしたものだろうか、ときわめて真面目な顔で問つた。

雲隠は珍しく声を立てて笑つた。どうやら克安という男に好感を持つたようだ。

「大丈夫です。あなたが大切なものは、あなたがそれと意識していくなくても、必ずあるのですから。わたくしはそれをいただきます。もちろん、痛みも何もありません。それがなくなつても……あなたは気づかないかもしません」

「それでは、『大切なもの』ではないのではないか？」

「いいのです、それでも」

「あなたは変わつているのだな」

納得いかない様子の克安を見て、雲隠は言葉を付け足した。

「そうですね……。説明が足りないかもしません。わたくしがほしいのはあなたの大切なもの、それは、『あなたの』であると同時に、『わたくしにとつて』価値あるもの、という意味にもなります」

「せつ……では、もつと難しいな。私にはそのようなもの、ないよ
うに思えるのだが」

克安は袖を振つて見せた。

「ほら、この通り。私は決して裕福ではない。富中で仕えてはいる
が、一介の兵士に過ぎない。見事な宝石も、いくつも部屋があるよ
うな家もない。毎日普通に生きていぐだけで精一杯なのだが」

「『一介の兵士』ね」

ようやくこじで心を落ち着けた学然は、確信に満ちた声で叫んだ。

「あなたは一介の兵士なんかじゃないよ」

「ん？ なぜそう思つ」

克安の目が光る。

「一、その口調。ある程度上の位にいるだろ。一介の兵士はそんな
話し方があまりしないと思つぞ。一、気配。あなたのその気配は一
介の兵士、なんていうもんじゃな」

「鋭いな」

彼は苦笑した。

「私の部下にもあなたほど觀察眼が優れた者はいない
「そりやどうも」

やはりな、と学然は内心思つ。彼は都でも相当の地位にある者な
のだらう。しかも彼はまだ若い。若いのに、そこまでの地位にいる
ということは、相当手柄を立てたか、または金で地位を貰えるほど
裕福かのどちらかだ。

（そんなお方が何で来るかね……）

よくわからん、と学然は首を傾げた。

彼はあまり裕福でないようなことを言つてはいたが、それでも普
通の民よりはよほど裕福に違いない。

そんな者がなぜここに来るほど強い願いを持つているのか、なぜ
あのような願いを心に抱いているのか理解できなかつた。

「どちらにしろ、結果的に差し上げるものは何もないかもしれない。
それでも願いは叶えてくれるか？」

「叶えましょ」「う

躊躇いもせずに雲隠は即座に答えた。

「では、頼む」

克安のその言葉に呼応するかのよし、克安の目の前に一枚の紙がふっと現れた。

そうして、すうっと文字が浮かび出る。そこには、克安の願いを叶える代わりに、克安がもっとも大切なものを雲隠に『叶える』といつ旨記載されていた。

「問題がなければ、その紙に触れてください。それで契約成立です」言われるままに、克安はその不思議な紙切れに触れる。とたん、紙は空氣に溶けて消えた。

初めて目にした仙の力に驚きを禁じえない様子の克安であったが、すぐにもとの冷静さを取り戻すと、軽く頭を下げた。そうして、窓の外に目をやつた。

ここにたどり着いたときはまだ日が空高くあつた。が、ずいぶんと西に傾いている。青く晴れ渡っていた空も今では、うつすりと橙色に染まりつつあつた。

「すまないが、このあたりに宿はないのか?」

さすがにこの時間にここを発ち、都に戻るのは得策ではないと考えたのだろう。

「あると思うか?」

「やはり……ないか

どうしたものかと、と克安はあいに手をやり、考え込む。

それを見て、雲隠は助け舟を出した。

「もしよろしければ、客間があります。そちらを使ってください。

今なら他に誰もいらっしゃないので、使っていただいても大丈夫ですよ」

「それは……すまない。恩に着る」

学然は、雲隠を居間に残したまま克安を客間へと案内する。

「普段は誰かが使っているのか?」

「ん?」

「いや、先ほど靈鷲は『今なら』と言っていたから」

「ああ

学然はぽりぽりと鼻の頭を搔きながら答えた。

「あんたみたいな人が来たときは、ここを使つてもうつていいからな。今はちょうどあんたしかいない。そういう意味だ」

そうか、と克安は言うと、荷物を卓の横へと置いた。

「面倒をかけてすまないな

「これも仕事みたいなもんだから気にすんな」

学然は、部屋の中の備品や、この庵の周辺のことについて一通り説明をすると、夕飯になつたら呼びに来るからと告げて、密間を後にした。

「彼はどんな様子でしたか?」

客間から戻つた学然に、雲隱はまず訊ねる。

「別に。取り立てて言ひことはないな」

食事の後片付けを開始しようと、食器類をまとめ始めた学然は不思議そうに雲隱を見る。

「彼は本当のことを言つていませんね」

「そういうことか」

学然は、内心どこかほつとじている自分に気がつく。

「彼が気になりますか?」

「当たり前だろ」

「あのような願いを口にするのだ。気にならないわけがない。ここにくるものはたいてい、何かしら事情がある者ばかりだ。当然、言いたくないことも山ほどあるに違いない。それに対しても、いちこち詮索していても詮無きことだ」

それは十分にわかつていて。

けれど、克安については、どうしても気になつて仕方がないのだ。

それはきっと、あの瞳のせいかも知れない。

「あいつは他人の命を奪うことなんてできない。そんなやつじゃないような気がする」

学然の気持ちを聞いて、雲隱は穏やかな微笑みを浮かべる。

「わたくしもそう思いますよ。あなたの感じたことはきっと間違いでないでしょ。それに……他者の命を奪つというような願いを持つた人は、おそらくここにはたゞりつけないと思いますよ」

「ああ、と学然はここでようやく納得した。

先ほど克安が願いを口にしたとき持つた疑問。やはりあのとき感じたことはあつていたのだ。

つまり、今までそいつた願いを持つた者がここに来たことはな

い。

「あいつが例外ってことは？」

「ありえません」

きつぱりと雲隠は言い放つ。

「つてことは……」

彼が口にした願いは、やはり真実ではないことになる。

「なんでもまた」

嘘なんかついてもまったく意味がないのに。

そもそも、ここに来たのがなぜか。願いを叶えてもらうためではないのか？

ここには、すべての人間が辿りつけるわけではない。

心に強い願いを持つたほんの一握りの人間のみが辿りつけるのだ。いつたいこれがどういう仕組みでこのようになつてしているのか、実は学然自身は何も知らない。

学然ももともとは克安と同じよう、「ここに願いを叶えてもらいにきたはず……」なのだから。

「とにかく」

雲隠の言葉で我に返る。

「どうであれ、彼に直接聞くしかありませんからね。明日、また訊ねてみましょう……」

旅で疲れているであろう克安^{クーアン}のことを気遣つて、学然^{ショーラン}は翌日^{シヨコラン}の朝食はいつもより遅めに作り始めた。

いつもどおり夜明け前に目を覚ましたらしい雲隱^{ゴンイイン}は、散歩に出かけるといったまま、まだ戻ってきていなかつた。

今朝の食事は四角い形をした饅頭^{トウ}と、豆苗^{タノ}の湯だ。蒸籠から湯気がもうもうとあがつてき始めたのを見て、学然はそろそろ克安を起こしてこよつと厨房を出た。

「おはよう」

突然声をかけられて、声を呑む。

いつの間にか、ちゃっかりと身支度を整えた克安が居間に座つていた。その手には、学然が読みかけの書物がある。

「ああ、そうだ。ここにあつた本を勝手に拝借していたが、よかつたか?」

「別にかまわないけど」

彼が手にしているのは、薬草について書かれたものだ。

「興味あんの? あんたに必要そうには思えないけど」

「そうでもない。こいつた知識はあれば役に立つ」

そういうと、克安は本を閉じた。

「何か手伝うことはあるか?」

「客は座つてな。もうあとはそつちに運ぶだけだから。雲隱も

がたり、と外で物音がする。

ちょうど雲隱が散歩から戻ってきたようだった。

「帰つてくる頃だから、な

「なるほど」

克安は片頬笑んだ。

そうして、三人は食卓を囲む。

できたての饅頭はほかほかだった。かぶりつけば、ほんのりとし

た甘みが口の中に広がる。

(うん、上出来だ)

学然は自分で自分を褒める。

久しぶりに満足なできだつた。

仙である雲隠は肉類を食べられないこともあり、ここでの食事はすべて肉類を使つていない。当然、現在出している食事の中にも一切肉類は使っていなかつた。

竹林に囲まれた庵では、野菜などの種類もさして多く採れるわけではないため、食卓はとても質素なものだ。

さすがに客人がきているときくらい少しほと豪華にしようと、学然は心持ち饅頭の数を多めに用意していた。中の餡もいつもは一種類しか作らないが、この日は一種類もの餡を作つてみた。

3個目の饅頭を学然がかぶりついたとき、克安がおもむろに口を開いた。

「 昨日の夜は、久しぶりに夢を見たよ。ここは不思議なのだな」
ぎくり、と学然と雲隠は顔を上げる。

「私は元来夢を見ない性質なのだよ」

二人の反応を見て、克安は補足する。

「なのに、ここでは夢を見た。ここまで旅の間も、都にいたころも、私は夢なぞ見なかつた。となれば、この場所に何かあると考えるのが自然だらう?」

(さすがだな……)

ここまで見抜かれるとは思いもしなかつた。

確かにこの場所では、克安が言うように特殊な作用が働き、訪れた者の心の奥底に眠つてゐる願い、不安といったものを夢として見せられることが多い。

より強く作用すると、場合によつてはこれから未来に起らね」とを夢見ることもあるといつ。

二人はこれを「夢鏡」と呼んでゐる。その者の心の内を映し出す鏡のようだからだ。

克安がみた夢は、彼にとつていゝものだつたのだろうが、それとも……。

克安と田が会つ。

彼は瞳を伏せて、小さく呟く。

「夢に出てくれただけまし、といふことか」

そうして、学然が入れたお茶を手にしながら、克安は静かに雲隠に問つた。

「私の願いは叶えてもらえるのだろうか?」

彼の質問に、雲隠は答えず、逆に質問で返す。

「あなたの願いは何ですか?」

「昨日言つたとおりだ」

雲隠は湯飲みを静かに置いた。

「もう一度問います。あなたの『本当の願い』は何ですか?」

「雲隠……私の願いは最初から何も変わってはいないよ

「『最も忌むべき者の命を奪つてほしい』ですか?」

克安は深く頷く。

「それは……」

雲隠はひと呼吸おいて続ける。

「あなた自身のこと、ですか?」

彼の唐突な発言に意味がわからず、学然はただ克安と雲隠を交互に見やる。

克安はそれには答えず、ただ目を閉じた。

ここまできて、やすがの学然も、ようやく克安が言わんとしていることを理解した。

「おまえっ!」

次の瞬間、がたりと立ち上がる。

「自分の命を奪えってのか? それが願いなのか?」

ばん、と力いっぱい机を叩く。かちやりと茶器が揺れた。

「学然」

雲隠が諫める。

「だつておかしいだろ？　自分の命を奪えだなんて。そんなの、おかしいだろ！」

「学然」

「先ほどよりも強く、再度雲隱は名を呼ぶ。

「おやめなさい。学然」

いつもの雲隱からは考えられないような鋭い声。

学然は、「くそっ」と一言言に捨てると、そのまま席には着かず、扉へと向かつた。

「学然！」

「今俺はここにいるべきじゃない。頭、冷やしてくる」

そう言葉を残すと、学然はそのまま部屋を出た。
むしゃくしゃした気持ちを抱えたまま、学然は庵を出た。その足は自然と庵の近くにある泉へと向けられていた。

「くそっ！」

学然は自分の中の嫌な気持ちを収めようと、泉に向かつて大声を出した。

（何だつて俺はこんなにいらついてんだ）

今までだつて無茶苦茶な願いを持つたヤツはいくらだつていていた。そのたびに人間の影の部分を見せ付けられたような気がした。もう、見慣れたはずだ。人間のそんな部分は。

それなのに、なぜ。なぜこんなにも心が乱されるのだろう。

なぜ、今回に限つて……？

自問自答する。

（あいつは、雲隱に……）

自分の命を奪つてほしいといつ願いを持つてきた。自分の命を差し出しに来たのだ。

それが、我慢ができなかつた。

自分の命を粗末にするやつが。

生きていられるのに、自分の命を差し出すやつとするやつが。

（生きて……）

常に頭の中にかかつていていた霧が一瞬、揺らいだように思えた。何かを思い出しそうになつたが、やはり霧は深く、晴れることはなかつた。

「学然」

声をかけられ振り返れば、そこには今回の元凶である克安が立っていた。

一瞬、彼を見て眉をひそめる。まだ、学然の心は乱れたままだ。ここに、彼に對して口を開けば、毒のある言葉しか出てこないような気がした。

克安だとて、己が原因で学然がかよつた行動をとつてしまつていることは、千も承知のはずだ。なのに、なぜわざわざ来たのだろう。文句を言いたいのをぐつとこらえて、学然はスッと克安から視線を逸らす。それが唯一自分ができることのよつた気がした。

これ以上、ひどいことを言つて克安を傷つけたくもないし、自分が不快な思いをするのもごめんだ。

どかつと、泉の傍らにある大きな石に腰を下ろす。すると、克安も歩み寄ってきた。

「あのは……」

「すまない」

耐え切れず、思わず文句を言おうとした学然の言葉を遮り、克安の口から出たものは、謝罪の言葉だった。

「学然の心を害してしまつたこと、心から詫びる」

頭を下げる。

そんな克安を、呆気にとられた表情で見上げていた学然は、一気に毒気が抜かれてしまった。

大きく肩で息をつくと、克安に隣りに座るよつめる。「別にあんたが悪いわけじゃないよ」

そう口にしたことで、学然も先ほどまでの感情が静まる。それと同時に、今度は自分自身に對して呆れた感情が湧きあがつて来た。（ホント、俺、何やつてんだろう。ガキだな、これじゃ）

「あー……」

堪らず叫んで立ち上がる。

「すまねえ！」

克安に向かつて頭を下げる。

突然の学然の行動に目をぱちくりさせていた克安は、ふっと吹き出すと盛大に笑い出した。照れくさくなつて学然も笑つ。

「私が何に見えるか？」

お互の気が晴れたところで、克安がこんな質問を投げかけてきた。

「ん？ 昨日も答えたと思つたけど？ あんたは高中勤めの兵士なんだな。しかも位はかなり上、だろ？」

克安は苦笑する。

「半分あつているが、半分は間違つているな

「なんだそりや」

一瞬、躊躇つた後、それでも克安は口を開いた。

「それは今のは話だ。五年前の戦の時は、私は今の職にはなかつた。いや……兵士ですらなかつた。私は……刺客だったのだよ」

学然の顔がこわばる。

克安はぎゅっとこぶしを握り締めた。

「あの戦の中、私は刺客として数多くの命を奪つた。その結果、今の職にある」

悲しそうな克安の笑み。

「だから……だから、あんたは自分を殺したいと願つたのか？」

学然の言葉に、克安は首を横に振つた。

「いや。それも一因ではあるかもしれない。だが、戦で敵の命を奪うは避けられぬこと。私がこう願うのは……」

克安は空を見上げる。

「親友をこの手にかけたからだよ」
「ああと竹林が風に揺れた。

今から遡ること10年前。

克安^{クアン}が住む喃国と、隣国桂との間は最悪の状態で、戦は泥沼化していた。

お互いが一歩も譲らず、利権を争い、多くの民の血が流れていた。克安は物心ついたときには、王宮の一角にある「施設」で育てられていた。そこには戦で両親を失い、一人で生きていくことが難しい少年たちが収容されていた。

彼らはここで立派な兵士になるために育てられていたのだ。その中でも特に精神的、身体的に優れたものは特別要員として教育を受ける。

「特別要員」 将来的には刺客となるために。

克安もその要員として選ばれていた。戦の表で戦う兵士ではなく、裏で人の命を奪う刺客。気づけば、わずか16歳にして、「施設」では最も腕が立つ刺客になっていた。

感情を押し殺す術を叩き込まれていたせいもあってか、克安はあまり喜怒哀楽を表に出すことはなかった。

そんな克安が心を許すことができたのが、同じ集団に所属している蓮狼^{リエンラ}という少年だった。

克安より2つ3つ年下だった彼は、刺客として今後生きていくことがとても不似合いなほど、人懐こい性格だった。一人孤立することが多かつた克安にまとわりつき、あれやこれやと話しかけてくる。初めはそれを鬱陶しいと感じていた克安も、蓮狼の性格にやがて心を開くようになっていた。

彼には「施設」の外に、双子の姉がいた。彼女が唯一の肉親なのだと、彼女を守るために自分は「施設」に来たのだと蓮狼はよく言っていた。

姉思いの彼は、外出の許可が出ると必ずといつていいくほど彼女に

会いに行つていた。

克安も誘われて、彼と共によく彼女の母とを訪れていた。

蓮狼はやんちゃなところもあり、どちらかというと騒ぐのが大好きにぎやかな性格だったのに対して、姉の翠蓮はとても物静かで穏やかな性格をしており、いつ会つてもにこにこと笑つていた。

それまでは、克安の能力の高さもあってか、周りの者たちから一歩退かれた場所から接せられていた克安は、人懐こいこの一人の姉弟を、いつしかとても愛しく思うようになつていた。

（この二人がいると、心が穏やかになる）

自分の手はすでに、多くの者たちの血で染まつていた。

ともすれば、どす黒い感情に支配されてしまいそうになる克安の心を、この二人がからうじて、通常の世界につなぎとめてくれているかのようだつた。

（何があつても、二人は自分が守る）

克安は心に強く誓つた。

すべての脅威から、自分がこの一人を守つてみせる。この温かな気持ちをくれたこの一人を。

しかし、幸福な日は長くは続かなかつた。

日増しに戦火の色が濃くなり、桂国が都へ迫つてきているという噂までもが流れ始めた。

はじめの内はただの噂だと笑つていた者たちも、一月後には青ざめ、これから先どうしたらよいものかと真面目に考え始めていた。そうしてさらに数カ月後、噂は現実のものとなる。

その日、克安は上官から命じられて、敵方の指揮官の一人を暗殺するため、都を離れていた。

指令を無事、成し終えて都に戻つたとき、克安の目の前に広がっていた光景は 敵味方両陣営により破壊し尽くされた街だつた。

かつては東の花と言われたこともあるほどの、華やかな街だつたはずなのに。なのに、このあまりにもの変わりようは……。

しばし呆然と立ち尽くしていた克安だつたが、ガラリ、と崩れる

瓦礫の音に我に返つた。

施設へと走つていく。

だが、街と同様に、やはり施設ももとの姿をすっかり失つてしまつていた。

「蓮狼！」

叫び、施設内を探したが、彼の姿は見当たらなかつた。そしてまた、仲間の姿もまったく見当たらない。

「まさか……」

不安を抱えたまま、克安は翠蓮が住む地区へと足を向ける。彼女が住んでいたはずの家は跡形もなくなくなつていた。その代わりに、そこにいたのは一人の少年。

「蓮狼……」

うずくまつている蓮狼近づき、肩を叩こうとした克安の手が空で止まる。

蓮狼の腕の中にいるのは一人の少女 息絶えた彼の姉だった。

蓮狼は静かに肩を震わせて泣いていた。

克安は堪らず、背後からぎゅっと蓮狼を抱きしめる。

「すまない、守つてやれなくて、すまない」

克安は幾度も繰り返した。

守つてやると約束した。

幼い大切な姉弟を。

それなのに、自分は守ることができなかつた。

本当に小さな小さな幸せだったのに。

(なぜ……)

なぜ、こんなことになつた？

なぜ、と繰り返す。決して返つてこない答えを求めて。

翌日、蓮狼は姿を消した。

克安には何も言わずに、一人。

「私は自分をずいぶんと責めたよ」

克安は傍らに落ちている石を、泉に向かつて投げた。石はぼちやんと軽やかな音を立てて沈んでいく。

「私が都を離れたなかつたら……。もつと早くこの事態に気づいていたら……あと少しでも早くあの場所に着いていたら、そうしたら翠蓮は死なずに済んだかも知れない」

「すきん、と学然の心が痛む。

その感情を、自分は知っているような気がした。
自分のことを責めて、責めて。

起こつてしまつたことは決して覆りはしない。

失つてしまつたものは戻つてきやしない。

けれど、自分を責めずにはいられなかつた。
この感情はいつたいいつのものだらう。

だが、いくら考へても、学然には思い出せない。これもきっと抜け落ちてしまつた過去の欠片なのかも知れない。

「私を責めてくれるのは、自分自身しかいない。いつそうのこと、誰かが私を責めてくれれば、楽だつたかもしれない……」

「バカ……だよな」

ぱつりと出た言葉。

自分自身に対し思わず出たものだつたが、克安は己自身に対して言われたものだと思つたようだ。

悲しそうに笑うと、ひとこと、「そつだな」と言つた。

そうして、話の続きを語り始めた。

気づけば、蓮狼が姿を消してから5年の歳月が流れていた。

あのとき、都までやつてきた桂国の軍を奇跡的に撃退してからも、桂国との間は相変わらずで、戦が繰り返されていた。

克安は施設から出たものの、刺客を辞めたわけではなく、王直属の刺客集団に組み入れられていた。

この集団は、その存在 자체が極秘とされていたため、克安のような肉親がいない者には適任であった。

内外問わず、中央にとつて都合の悪い者たちの命を奪う日々。大切なものを失つてしまつた克安にとって、もはや守るものは何もなく、以前にも増して、彼からは感情というものが失われてしまつていた。

もはや、何が正しく、何が悪いのかさえ、彼にはどうでもいいことだった。ただ言われた任務だけを淡々とこなす日々。

きっと自分にはそのうち天罰が下るだろ。そうして、儂くなつてしまつたとしても別に自分はかまわない。むしろそのことを自分は強く望んでいる。

早く、早く連れて行つて欲しい。あの温かな日々へ。あの穏やかな心が取り戻せるなら自分は……。

しかし、そんなある日、ひょっこりと蓮狼が都へと戻ってきた。

「お前……！」

あふれる想いに言葉を失つた克安に、蓮狼は申し訳なさそうに笑つた。

「あの時、翠蓮を守れなかつた自分が不甲斐なくて……もつと自分の腕を上げるために、このままじゃダメだつて……そう思つたんだ」

そこには、もう昔の自分を頼つてくれていたかわいい蓮狼の姿はなかつた。

立派に成長した彼のことを、心底うれしく思い、克安は再び自分の傍にいてくれないか、と頼む。

「ありがとう、そつさせてもうつよ」

屈託なく笑う蓮狼を、克安はやはり昔の面影が残っていると懐かしく思うのだった。

失つてしまつた大切なもの。

それが戻つてきたことで、克安の心には再び光が差し始めた。以前のように、克安にべつたりとこうことはなくなつていたが、それでも蓮狼はいて欲しいときには、いつでも傍らにいてくれた。克安は己が幸せになることは、もう決してなかろうと思つていた。自分の手は、多くの人の血で染まつている。

どんなに洗つても洗つても、それが落ちることはない。命じられれば命を奪う。

それが女であつても、子どもであつても。容赦なく。

心を凍らせて、克安は命を奪い続けた。

だが、任務を終えた後は、一気に張り詰めていた気持ちが緩み、それと共に後悔と悲しみが己を襲う。

今までであれば、克安は部屋に籠り、それらの感情が行過ぎるのをじつと待つていた。

だが、今は違う。

そういうときは、必ずそばには蓮狼がいてくれた。昔のようになつみの昔。彼は何かを言つわけでもなく、ただ黙つて克安の傍らにいてくれた。

克安はそれが何よりも嬉しかった。

己が幸せになることは許されない けれど、このひとときが、克安にとつては何よりも幸福を感じるときだった。

だが、やはり幸せは長くは続かなかつた。

「情報が漏れている」

上官に言われ、克安の顔がこわばる。

それは、蓮狼がこの国に戻つてきてから数カ月後のことだった。

桂国のとある要人の命を奪えという指令を受け、克安たちは桂国と喃国との国境に向かつた。途中まではうまくいっていた。だが、あと少しでというところで、その要人はするりと逃げおおせてしまつたのだ。

「そうとしか考えられん」

克安も心の内のどこかで思つていたことだつた。

通常、自分たちの仕事は少人数・短期間で行うのが鉄則だ。情報が外に漏れてしまつてはまったく意味がなくなつてしまつた。関わる人数も絞られていた。

今回の任に関わっていたのはわずか5名。これでも多いほうだった。

まずは目の前にいる上官、そして克安。共に施設で育つた仲間の2名。そして 蓮狼。

今回の標的が逃げることができたのは、ただの偶然ではない。この中の誰かが、情報を敵方に流したとしか考えられなかつた。

そして、この中で最も疑われるべき人物は……

「蓮狼の行動に注意しろ」

予想通りの上官の言葉が、克安の胸を深くえぐる。

「ですが、蓮狼は……」

彼はそのようなことをする人間ではない。

何よりも、桂国に情報を流して、蓮狼に何の得がある?

彼の姉、翠蓮は桂国に命を奪われたも同然だ。

そんな桂国に彼が力を貸すはずがない。

「克安！」

ぴしやりと上官が鋭い声で彼の名を呼ぶ。

「任務に私情を挟むな。お前らしくもない」

克安はハッと顔を上げ、次いで「申し訳…ありません」と頭を下げた。

「克安……私はお前を信じている。次の 任務だ」

上官から渡された竹筒の中には、いつものように紙切れが数枚押

し込められていた。

克安は中から丁寧に一枚ずつ取り出すと、その場で広げる。薄明かりの中、それらに田を通した克安の表情がみるみるうつむけ変わっていった。

「これは……！」

それは、数年前に桂国に寝返り、喃国との情報と引き換えに桂国で取り立てられたある男の命を奪え、といつて命であった。

「これをもって蓮狼を試せ」

あくまでも淡々と上官は告げる。

「少しでも妙なそぶりを見せたらすぐに斬れ

上官のその言葉は、重く克安に压し掛かるのであった……。

克安たちは、3日後都を発ち、桂国との国境沿いへと赴いた。そこでは戦が行われていたが、ここ数ヶ月は膠着状態が続いていた。この現状を打破すべく、克安たちの到着を待つて、作戦が実行に移された。

喃国はまず、桂国に悟られぬよう軍を2つに分ける。2つのうちそのまま今の場所に残る部隊は少数とし、多くを移動させた。ちょうど桂国の軍が陣を張っている場所から桂国へ戻るために必ず通らねばならぬ場所に。

そこは細い山道が続いている。そして、その中でも難所といわれている場所は、両脇がそそりたつ崖になっていた。

喃国の軍はまさにこの場所で、桂国軍を迎えうつつもりだつた。残された少數部隊は、2つにわけたことを悟られぬよう、今までと同じ数の松明を夜になると掲げた。

その数を翌日は500だけ増やした。その次の日はさらに千増やす。そうして5日後にはついに最初の倍にまで増やしていた。

桂国側が動き出したのは、その翌日のことだつた。

こちらの思惑通り、退却し始めた桂国。

見事、桂国は勘違いをしたのだ。喃国の軍はまだまだ余力があるのだと。初めは均衡を保つっていた兵士の数も、ここまで来ると、到底敵ではない。一端、退くのが得策とでも思つたのだろう。

よし、と誰もが心の中で叫んだ。このまま行けば、一気に喃国が勝利できる。

次の作戦を実行に移す前夜。

見張りの兵士以外が眠りに着いた深夜のことだった。ふと、物音を聞いた気がして、克安は身体を起こす。

(いない……)

隣で寝ていたはずの蓮狼の姿が見えない。

しまつた、と心の中で叫ぶ。

克安は他の兵士に気付かれぬよう、天幕の内から出ると、辺りを見渡した。

近くではパチパチと松明のはぜる音が聞こえた。

（自分だつたら……）

見張りの兵士がいる方角へは間違つても行くまい。
行くとしたら、陣の東側。ちょうど崖になつてゐるその下には川が流れている。

適度な暗闇。そして、陣からは見えない死角。

案の定、克安はそこで見つけたくはなかつた人の影を見つけてしまつた。

闇の中でほのかな灯が揺らめく松明を持ち、川の下流めがけてゆらりと松明を振る影。

「蓮狼……」

声をかけると、ぎょっとしたように彼は振り向いた。

「克安……」

「何をしていた？」

裏切られた……信じていたのに、裏切られた。上官が言つてのこととは本當だつた。裏切り者はこんなにも身近にいた。
まさか、と思つた。

絶対にありえないと思つていたのに。
それなのに……。

「何をしていた？」

低く、再度克安は問い合わせる。

それに対して、嘲りの色濃い笑みを浮かべ、蓮狼は言つた。

「あなたの下なら機密情報も入りやすい。桂国にはずいぶん高値で買つてもらえたよ

「お前は……何を……」

蓮狼は袂から紙切れを取り出す。

「情報を桂国に。気づいていたろ？」

「な……ぜ、なぜこんなことをした！」

「　　甘い、な。昔からあんたはそうだった。人を信じて、決して疑うことしない」

蓮狼は目を細めた。

次の瞬間、克安の左目に鋭い痛みが走る。

克安は己の身に何が起こったのか理解するまで、数秒を要した。頬を伝う生温かい感触に、初めて蓮狼に斬られたことを知る。

「蓮……狼……」

「だから言つただろう？　あんたは甘い、と」

「どうして……！　何があつた！？」

「どこまでも……お人よしなんだな。そんなあんたが俺は……」

一瞬、蓮狼が浮かべたのは悲しげな笑み。だが、彼は最後まで言葉を続けることはなく、突如手にしていた松明を谷底へと落とした。辺りが一気に闇に包まれる。

それとほぼ同時に、再び蓮狼の剣が克安を襲つた。それを、間一髪のところで受け止め、流す。

勢いあまつた蓮狼が体勢を崩す。それを克安は見逃さなかつた。剣を反すと、気配だけを頼りに突く。

確かな手ごたえ。

蓮狼の低い声が聞こえた。

生温かい血が剣を伝つて大地に落ちる。

ぐらり、と彼の身体が傾いた。それと同時に、彼は最期の力を振り絞り、懐から取り出した短剣を投げつける。が、それは克安を大きく外れて、背後の大樹の茂みへと消えた。ばさり、と何かが背後で落ちる音が聞こえたような気がした。

（何……だ？）

気にはなつたが闇の中ではわからない。

続いて聞こえたのは、がらりと崖が崩れる音。はつとなつて思わず手を伸ばしたが届かない。蓮狼の身体は　そのまま谷底へと姿を消した。

ひょおおおと淋しく風が鳴いた。

(なぜ……だ)

克安はそのまま、蓮狼が消えていった谷の傍らから動けずにいた。なぜ蓮狼は裏切った？

いや、そもそも裏切るも何も、彼は初めから敵国の反間だったのだ。それに気付かず、己は何ということをしてしまったのだ。敵だとも……気付かず。

(いや、いや……違う……)

克安は闇の中でぐっと唇を強く噛み締める。

あのとき 翠蓮がこの世を去ったとき、すべての歯車は狂いだしたのだ。

自分が守ると決めていたのに。それなのに守ってやることができなかつた。

あのとき、自分が一人を守つてやることができるについたら。せめて、蓮狼が喃国を出て行くのを止めることができていたら。

(そうしたら、蓮狼はこんなふうにはならなかつた)

蓮狼をこんなにも追い詰めることはなかつた。

蓮狼はいつたいどんな気持ちで、喃国に戻ってきたのだろう。反間としての命を受けて 。

かつての祖国。かつての 友。

それを前に、彼は何を思つていたのだろう。

昔受けた、自分への辛い仕打ちを思い出し、笑顔の下にある怒りを隠していたのかもしれない。

自分は、そんな蓮狼の気持ちに気付くこともせず 何をしていたのだろう。

強い強い自責の念に駆られる。

だが、どんなに己を責めても、蓮狼がなぜ祖国を裏切ったのかは理解できなかつた。

あのときのことを恨んでいる、といつのであれば、それは祖国喃だけではなく、桂にも向けられるべきものだろう。

だが、蓮狼は敢えて祖国と敵対することを選んだ。

喃国の中核部の情報を得られる場所に近づき、桂へと流す。この行為は、今も昔も敵国である桂の利にはなるが、祖国喃の利にはまったくならない。

なぜ、蓮狼の恨みの念は、敵国桂ではなく、祖国に向けられてしまったのだろう。

（私への……恨み、か……）

守ってくれなかつた克安への恨みの念がそうさせてしまったのかもしれない。

どんなに考えても、ことの真相はもうわからない。

わからぬからこそ、克安は余計に「口を責め続けてしまう。

なぜ　。　
どうして　。

何度も何度も疑問を心の中で繰り返す。

疑問を、すでにいなくなつた友に投げかけながら、答えを探し続けた。答えは決して見つからないとわかつているのに。

翌朝、克安の左目に包帯が巻かれているのを見て、何事かと周りの者たちは騒いだ。また、それと同時に蓮狼の姿が見えないことを不審に思つた者たちから、彼の所在を訊ねられたが、克安は何も語らなかつた。

克安のただならぬ様子に、何かあつたのだと察したものもいたが、これ以上しつこく訊ねて、克安の怒りを買つことを恐れ、誰もそれ以上は突つ込んで聞いてはこなかつた。

克安は、悶々とした気持ちを抱えたまま進軍を続けた。

そうしていよいよ、次の作戦実行まであとわずか、といふところで、桂国の軍に異変が起きた。なんと、日が落ちると同時に次々と兵士たちが投降してきたのだ。

何が起こつたのか、克安たちも理解できずにいた。

それはまったく考へてもいないことだつた。

当初の予定では、ここから先にある山間の細い道で一気に桂軍の軍を襲い、その混乱に乘じて裏切り者の首を取り、さらりそのまま桂国軍を壊滅させるはずだつた。

捕まえた捕虜に理由を問い合わせ、それを聞いた克安たちは絶句した。

「喃国が朱国の後ろ盾を得た。直に援軍が到着する」

そんな馬鹿な、と誰もが息を飲んだ。

そんな事実は存在していない。

確かに、喃国の西には大国の朱がある。だが、朱国は資源も豊饒な大地もない小国のことなど眼中にない。今のこの国の現状を鑑みれば、喃国に手を出すことで負担が増えることはあつたとしても、朱にとつて利益となることは少ないはずだ。

そのような浅はかなことをする国ではない。

なのになぜこのような話が

？

不思議に思う者もいたが、恐らくこちらの作戦を勘違いして、桂国軍内部に混乱が生じたのだろうと、みな口々に言つた。

だが、このとき、克安だけは周りのものとは異なる反応を示した。
(まさか……)

顔面蒼白で、陣を出る。

蓮狼がいなくなつた今、ことの真相を知るものはいない。もはやどんなことをしても、彼の真意を知ることはできない。

だが、克安にはこのような結果になつたことの背景には、蓮狼が絡んでいるとしか思えなかつた。

彼は何をしていた？

桂国に……何をしていた？

本当に彼は喃国を裏切つたのか？

裏切つていたとすれば、どんな情報を桂国に提供していたのだ？

今まで喃国にとつて不利益になることは、何も起こっていない。

起こつたことといえばそれは

どんなに考へても、克安の結論はひとつの方へといつてしまつ。

(あいつは)

蓮狼がじょうとしていたことと、この驕國に「魚」となることではなく、むしろその逆 ？

もしそうであつたなら、自分は.....

「うわあああ

克安の叫びは、悲しげな紺碧の空に吸い込まれていった。

蓮狼に斬られた克安の左目は回復することなく、完全に光を失つた。

だが、戦は終わった。

桂国は滅び、この国は生き残つた。

都に戻つた克安は、今回の戦の陰の功労者として今の地位を授かつた。

だが、克安は「口が口のまま口に」についてはいけない、といつ気持ちがあふれていた。

誰かが自分を罰してくれれば、どんなにか楽だらう。だが、喃国で今の克安は功労者でありこそすれ、罪人にはなりえない。

街を歩いても、宫廷にいても、どうしても蓮狼のことを思い出してしまう。一層のこと、国を出ようか。すべてを捨ててしまおうか。そう考えていたある日のこと。克安は街で妙な噂が流れていることを知る。

それは、蓮狼のことだった。

克安は噂の出所である街の片隅にある小さな小屋を訪れた。そこで自分を出迎えてくれたのは、一人の老人だった。

見覚えのある顔だ、と克安は思った。

「お久しぶりです」

老人のほうも克安を覚えていたらしく、頭を下げた。

「もう……何年ぶりですか。すっかり立派になられて」

老人はしわくちゃの顔を、さらにしわくちゃにさせて再会を喜んでくれた。そのときに見えた欠けた前歯で、克安はすべてを思い出す。

幼い頃、蓮狼と共に翠蓮のもとを訪れたとき、よく菓子をくれた隣人の男だった。

「お元気で……なによりです」

克安は彼の話から、蓮狼が情報を売つて得た金をすべて己の懐に入れることをしなかつたことを知つた。戦災孤児たちを育ててているこの老人にすべてを託していたのだ。

「蓮狼はいつも案じておりました。このままではまた、悲劇が繰り返されてしまうだらう。早く戦を終わらせなれば……と」

「このままでは遠くない未来、喃国が滅びてしまうだらう。」

すでに国庫は尽きかけている。本当は戦などできる状態ではもはやないのだ。

喃国が滅び、すべてが無に戻ることで、よくなるものもあるかもしれない。だが、今までの人類の歴史を振り返つてみても、国が滅んだ後には、決して幸せが待つているとはいえない。

他国に呑み込まれ、圧政が続くとも限らない。

人々の生活はますます困窮するだらう。

このことは何も喃国にだけ当てはまるのではない。喃国と桂国がすべての力でもってぶつかり合えば、そこには大きな犠牲が出来ることになる。

さすれば、多くの不幸な子どもたちを生み出すことになってしまふだらう。

昔の自分たちと同じ境遇の子どもたちを。

蓮狼はそれを避けようとしたのかもしない。

そう、彼がああまでして守りたかったもの、それはこの国だったのかもしない。この国で生きる人々の笑顔だったのかもしない。このことに気づいたとき、克安は職を辞するという考えを封じた。自分は蓮狼の遺志を継いで、この国を守つていこう、と。いつか本当にこの国が平和になつて、自分のような存在が必要とされなくなるその日まで、自分は守り続けよう。蓮狼が愛したこの国を。この国の民の生活を。

それが自分にできるせめてもの償い。

すべてを捨てるのは、償いが終わった後で十分だ。

「なんでこの話を俺に?」

「なんとなく、かな」

しかし、克安は一呼吸おいた後、首を横に振つて、自分の言葉を否定した。

「いや、違うな。誰かに知つておいてもらいたかったんだろ? 私といつ人間の生き様を」

「勝手なやつだな」

「まつたくだ」

克安は、はははと笑つたが、直に真面目な顔へと戻つた。

「心の痛みから逃げようとしている私は、やはり弱いのだろうか」

「俺さ、ここに来る前の記憶ないんだわ」

克安の問いには答えず、あつけらかんと告げた学然に、克安は目を見開いた。

「すばーっとな、抜け落ちまつてんの」

だから、学然は自分の過去を知らない。

「ここに来た理由も、まつたく覚えていない」

気がつくと、雲隠コブインが目の前にいた。

彼はただ笑みを浮かべて、ここにいてもいいといつてくれた。だから学然はここにいる。

行くべき場所も何もないのだから。

だから……。

でも、ここに来た、といつことはおそらく叶えてももらいたい何かがあつたはずだ。

それはきっと、今までここにやつてきた者たちのようだ、強い願いだつたに違いない。今、横にいる克安が持つている願いのようだ。自分では叶えることが困難だけれど、その願いは決して諦められないものだつたはずなのに。

「すいぶんと……」

言葉を途中で呑み込んだ克安を見て、学然が続ける。

「あっけらかんとしている?」

クツと思わず克安は笑う。つられて学然も笑う。

「だつて仕方ないだろ? 忘れちまつてんのはビリジョウもないし。それに俺、そこまで過去にこだわってないの」

「学然は私とは違つて、強いのだな」

「そんなことねえよ。俺はただ…覚えていないだけだ。覚えてねえもんにこだわつたつて不毛だろ?」

「本当に面白いな、学然は」

「あんたほどじやないよ」

克安は自嘲氣味に笑つた。

「私のことを軽蔑するか」

「いや」

学然はふうと息をついた。

「人間つてのはさ、どうしたつて過去から解き放たれることはできねーんだらうな。俺みたいにきれいさつぱり忘れちまわない限り」
そんな学然でも、生きていれば昨日のことは過去になつっていく。いつかはやがてその過去に捕われ、歩むことができなくなる日が来ることもあるかもしれない。

だから、自分に克安を責めることはできない。

「俺はそこまでもあんたのことを知つていいわけじやない。あんたが何を抱えているのかをしらすに文句言つ資格なんて、本当はねえよな」

「おかしなことを言ひ」

「そつか?」

克安は小さく笑つた。

「学然も雲隠も本当に変わつていい」

「あんたに言われたくないんだけど」

「そうだな、と克安は空を仰ぐ。学然もつられて仰ぐ。

竹の葉の間から降り注ぐ日の光はとても優しい。まるで心を癒してくれるかのようだ。雲隠がここに好んでくる理由が、なんとなくわかった気がした。

克安にもこのような場所がそばにあればいいのに。
そうすれば、彼はあのような願いを抱かずともすんだかもしれない。

妙に切なくなり、学然は目を細めた。
せめて、今この瞬間だけでも、彼にとつてここが癒しの場となることを祈った。

その日の夕方、克安からこの地を発つことを告げられた一人は、せめて明日の朝にしたらどうかと勧めた。

確かに一度ここに来た者であれば、帰りは至極楽になるはずだつた。庵を出て西へ向かえば、およそ数刻で己が望んだ地へ戻ることができる。

だが、そうであったとしても今からでは、確実に夜になってしまうだろう。

「いや、この上は一刻も早く都へ戻りたいのだよ」

克安は己がした願いが願いだけに、このままここでゆるりと時間をすごせば、この地で最期を迎えてしまうかもしれないという懸念があつたようだ。

これ以上引き止めて仕方がないとわかると、学然ショウエラは台所の奥から饅頭をいくつか持つてきた。

「腹減つたら食べろよ。俺の自信作だからな。 朝の残りだけど」「ありがたい」

笹の葉に丁寧に包まれた饅頭を笑顔で受け取つた克安は、雲隱コンイエンに目を向けた。

「本当に願いは叶えてくださいのか?」

最後に強く問う。

田をそらさずに、雲隱はそれを受け止め、静かに告げた。

「 あなたの大切なものと引き換えに……。街に戻ればわかる」と

「わかつた。疑つて申し訳ない」

「いいえ、と雲隱は笑む。

「ずいぶんと世話になつた」

克安は荷物を背負うと、一人に向かつて手を上げた。

「達者にな」

「あなたも、な」

克安は少しだけ複雑そうな顔をしたが、小さく笑つた。
去つていく彼の姿が見えなくなるまで、雲隠と学然はじつと見送
つていた。

「克安！」
〔クアン〕

久しぶりに宮中に顔を出すと、驚いた同僚が駆け寄ってきた。

「お前、傷はどうしたんだ？」

「ああ……どうしたもんだろうな」

「お前、自分の顔だろ？」

克安は笑つてそれには答えなかつた。

〔クアン〕
雲隠は「大切なものと引き換えに」と条件を出した。自分にはその「大切なもの」が何かはわからなかつた。

もう守るべきものは何も残つていなかつたから。

この傷がついたときに、大切なものはすべて失つてしまつていたはずだつたから。

だから、雲隠にあの言葉を言われたときも、

「差し上げられるものは何もない」

と言つたのだ。

あの時、雲隠は大切なものはやがて自然と克安のもとから去るだろう、と言つていた。

（その結果が、これ……か。本当に物好きなものだな）

だが、今の克安には、なぜ雲隠が傷を持つていつたのかがなんとなくわかる気がした。

今の自分を形成しているのは、すべてはあの傷だつた。

あの傷ができたからこそ、今の自分が存在している。

大切な友につけられた傷。あの時、傷つけられなかつたならば、自分は刺客から足を洗うこともなかつただろう。

身体も、心も傷つき、人の心の怖さと脆さと、そして優しさを知つた。

とてもとも 大切な……。

克安は傷があつた場所に触れる。

そうして、思つ。

傷がなくなつたところとせ、願いの成就は近い と。

「克安様、そろそろ時間です」

部下の言葉に、克安は手を上げる。

「ありがとう、今行く」

今日はこれから街を巡回しにいくことになつてゐる。

富中の警備が本来の仕事ではあつたが、克安は自ら好んでよく街へと降りていつていた。

蓮狼が守つたこの国を、人々の笑顔をもつと身近に感じたこと、そう強く思つていたから。

「じゃあ、行くよ

「ホント、お前、物好きだよな。そんなこと部下に任せたければいいのに」

先ほど、雲隱に對して思つていたことを、また同僚に言われて、思わず笑いがこみ上げてきた。

「私がこんなことをしていられるのは、それだけ平和だつてことだ

「お前な……」

呆れたように言つ同僚に「じゃあな」と別れの挨拶をすると、克安のことを待つ部下たちのもとへと足早に向かつていつた。

「本当に我々だけでもいいんですよ?」

「いや 私も行くよ」

いつも交わされる同じ会話。

「君たちにも苦労かけるな……」

自分が部下たちと行動を共にするために、他の部隊の者たちからあれやこれやと言われていることを、克安は知つてゐる。

だが、克安にとつてこれだけは譲れない。

まったくもつて自分はなんと頑固者だつて思つたのだが、それでも克安は城下へと降りる。

「いえ、私たちも諦めでありますから」

「言つな

それでも自分についてくれる部下たちに感謝しながら、克安は笑った。

昼過ぎの街は、ゆつたりとした時間が流れていた。

行き交う人も比較的まばらだ。

街角ではいすに腰掛けたまま、うとうとしている老人がいた。そのひざでは三毛猫が気持ちよさそうに背を丸めて眠っている。

（本当に、平和だ……）

もう、自分がここにすることは何もない。

もう、何も……。

そう思つたときだつた。克安の視界に入つたのは、前方から走つてくる馬車。そして、そこに犬を追いかけて飛び込んでくる一人の幼き少女の姿。

彼女は追つてゐる犬に気を取られて、馬車がやつてくることに気づいていない。

（だめだ！）

このままでは間に合わない。

思つより先に克安の身体は動いていた。

激しい音を立てて近づいてくる馬車。少女がようやくそれに気づく。大きく目を見開き……。

大きな音があたりに響き渡る。

わあ、という人々の声。

宙に舞つたのは　克安の身体。

克安が最期に見たのは、蒼くどじまでも広がる美しい空だつた。

静かな湖畔で雲隠^{コウイン}は月明かりの下、一人二胡を奏でる。低く、高く。

二胡の音は学然^{ショーラン}の部屋にも届いた。

その音色で、学然は克安の願いが成就したことを知る。

(本当に、不器用なやつだよな……)

克安^{クアン}も、そして雲隠も。

二人とも悲しいくらいに生きることに不器用だ。

学然は見覚えのある書物を手にする。

(克安が読んでいたやつか)

彼がここにいた時、手にしていた書物だった。その間から一枚の赤く紅葉した楓の葉がはらりと落ちた。

いつの間にか紛れ込んでしまったのだろうか。それとも、克安が栄代^{エイダ}わりに挟んだのだろうか。

それを見た学然の頭の中を、風のように何かがよぎつていった。だが、すぐにまた静けさが戻る。

なに^ノともなかつたかのように、再び雲隠の一胡の音色だけが響き渡る。優しく、すべてを包み込むように。

第6章（後書き）

第2話はこれにて完結。

このお話を書くとき、真っ先に書き始めたのは、実は第5章でした。

克安が最期に瞳に移した空。

それを描きたくて書き始めました。

相方に「ここだけは絵にして」そう無理を言つて、サイトではこの部分をマンガにしてもらっています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4555o/>

竹林奇譚 第二話 癒せぬ傷

2011年1月9日20時26分発行